

# 生徒が英語科での学習を自分事として捉えるようになる授業実践

## —英語の歌詞について生徒が自らの問いを生み出す学習デザイン—

佐野 一馬

金沢大学大学院教職実践研究科

**【概要】**本実践研究は、中学校外国語科の授業において、英語で書かれた楽曲の内容について生徒自ら問いを生み出す学習デザインを導入し、生徒の内面に働きかけることで、生徒が英語学習に主体的に取り組めるようになることを目的とする。具体的な実践としては、帯活動として問いを創る活動とその答えを考える活動を、改善を重ねながら、個人・ペア・グループ・一斉の形態で生徒に取り組ませた。授業デザインの有効性の検証は、授業中の生徒の様子を撮影した映像や振り返りの記述、授業後のインタビュー等を分析して行った。その結果、2つのことが明らかになった。1つ目は、自ら問いを創らせることによって、学習に対する意欲の向上が見られる。2つ目は、すでに答えのある問いよりも多様な答えが生まれる問いが、意欲と関係するということである。この活動では、教師がヒントとして発する問いが生徒の作る問いの「型」となってしまう、自由な発想を妨げるケースが課題として挙げられる。今後、多様な問いを生徒が生み出せるようにするために、足場かけとなる教師の問いを工夫する必要があることも分かった。

### I 問題と目的

#### 1. 問題

##### (1) 授業の問題点

中学校の英語科では、新学習指導要領の全面実施により、2021年から「学ぶ単語数や文法事項の増加」という大きな変化があった。このような変化に伴って生じる生徒の英語学習に対する負担感を低減させるために、生徒が興味・関心を抱ける授業実践をしていく必要があると考えた。また、英語科の授業への抵抗を持つ生徒は依然として少なくないこと、生徒が英語の授業を受ける必要性を感じておらず、英語の学習やその内容を自分事として捉えていないことが、勤務校で2023年度に実施した授業アンケートで分かった。

筆者はこれまでの実践として、生徒が学校で学ぶからこそできる他者との関わりの中で、あるトピックについて意見交換をしたり、

議論を交わしたりする内容の授業を展開してきた。さらには、授業で英語の楽曲を取り入れたり、映画、ドラマ、CM等の媒体を活用した授業を展開したりすることで、生徒の「何を言っているのか知りたい」という気持ちが喚起され、学習に対する様子が変わっていくように感じた。これらの実践の中でも、筆者はとりわけ英語の楽曲を取り入れた授業に力をいれて生徒の変容を感じてきた。そのことは、2023年度の3学期に実施した授業アンケートの結果からもうかがえる。「ペア・グループ活動で楽曲分析を行う活動（詳細は後述）を通して自分の英語学習へのモチベーションが向上した」の項目において93%の生徒が「そう思う」と回答した。記述式アンケートでは、「グループやペアで意見や考えを交換する活動を通して得られるものが多い」という回答が複数あった。

## (2) 楽曲導入に関する先行研究

先に述べたように、筆者はとりわけ英語の楽曲を取り入れ、歌詞を自分なりに解釈したり、その歌詞の音声変化に焦点を当てて指導をしたりする授業に力をいれてきた。先行研究においては、英語の歌が“authentic materials”を提供し、学習動機を高めると、Saricoban & Metin (2000) は次のように主張している。

歌は、対象文化への新たな洞察を与えてくれます。歌は、文化的なテーマを効果的に提示する手段です。本物のテキストを提供するため、学習意欲を高めます。歌を通して、言語のアクセント、リズム、イントネーションといった韻律的特徴が提示されるため、歌を用いることで、構造的な要素の集合に分割されていた言語が、再びひとつのまとまりを持つようになります(中略) 歌は学習者を楽しませ、リラックスさせ、学習構造を学習または練習する際に、学習に対する生徒の消極的な態度を解消する効果があります。歌は、生徒のリアリティと文脈を提供することで、文法事項をより理解しやすく、容易にします。語学教師である私たちにとって、歌を使うことは大きなメリットとなります。なぜなら、私たちの関心事は、生徒のモチベーションを高め、授業中に彼らの注意を最大限に引き付けることだからです (pp.1-3)。

また、強勢・リズム・抑揚といった英語の音声面の特徴を学習できるため、有効な英語学習教材だとも筆者は考えている。

## (3) 解決すべき課題

前述のアンケート結果には「ペア・グループ活動」という学習形態が関係しているが、別のアンケートの「(楽曲を扱う) 題材に対して興味・関心を持つことができた」の項目では89%の生徒が「そう思う」と解答していた。

それにもかかわらず、実際は、授業に臨む姿勢が受け身になっている者がいたり、楽曲分析における導入部において、漫然と楽曲を聞いていたりする生徒が見受けられた。このことから、単に楽曲を取り入れただけでは、生徒の自発的な学習意欲が生まれないのではないかと考えた。

## (4) 楽曲を自分事にするための先行研究

こうした問題を解決するために、活動を単なる楽曲分析で終わるのではなく、もっと自分に関係するもの(=自分事)として生徒に関わらせるような仕掛けが必要である。そこで、英語で書かれた楽曲の内容を生徒が自分に関係があるものとして考えられるような、生徒が問いを自ら生み出す学習をデザインしたい。Leslie (2022) は問いかけという行動について、以下のように述べている。

ハーバード大学の教育学教授のポール・ハリスは、子どもの問いに関する研究をしている。彼はデータに基づいて計算した結果、子どもは二歳から五歳のあいだに「説明を求める」質問を計四万回行うと推定している。「途方もない数です」と彼は言う。「これは、問いかけという行動が認知能力を発達させる重要な鍵であることを示唆しています」(p.85)。

子どもは自らの意思で楽曲の内容を探究し、何らかの答えを見つけようとするれば、そのことが好奇心や英語学習への意欲を高めることになる。従来の方法である、教師からの発問で進める「与えられた問い」に答える場合、すでに決まった答えがある。「与えられた問い」に答えるだけでは、生徒は題材が自分に関係があるものとして捉えにくい。そこで、生徒自らが学びの主体となり、自分に問いかけ、友人にも問いかけながら、考えを深めていこうとするようになることを目指し、すでに答えのある課題ではなく、答えのない課題につ

いて、自ら問いを立てながら、そのことについて、考える力をつけていってほしいと考えるに至った。

## 2. 本研究の目的

英語の楽曲内容と生徒の内面を結びつけることを促し、生徒が自ら問いを生み出す学習を通して、英語学習への主体的な取組を促進する方策を探る。具体的には、次の2つの研究課題を設定した。

### (1) 研究課題 1

楽曲分析の段階で、生徒自らが問いをつくることで、生徒の学習に対する意識は、受動的なものから能動的なものへと変化するのか。

### (2) 研究課題 2

問いをつくることで意欲が向上している生徒については、どのような問いが意欲と関係するのか。

## II 研究方法

### 1. 研究対象

#### (1) 対象生徒

石川県内の公立中学校 第2学年1学級の生徒34人を対象に実践を行った。

#### (2) 抽出生徒

楽曲への関心と、授業への意欲という観点から、4名の生徒を抽出した。

生徒A：英語の楽曲に強い関心を持ち、英語の授業では、挙手して発言する等、意欲的に学習に取り組んでいる。成績は上位に位置し、授業中は自分の考えを持ち、それを周りに広げようと積極的にペア・班活動で発言をしている。

生徒B：英語の楽曲に関心を持ち、英語の授業にはある程度意欲を持って取り組んでいる。成績は中位に位置し、自らの考えをしっかりと記述したり発表したりする傾向がある。

生徒C：英語の楽曲に関心を持っていないが、英語の授業に積極的に参加する様子は見られる。成績は中位に位置する。分からないこと

を質問したり、新たに浮かんだ疑問を周りに広げたりすることができる。

生徒D：英語の楽曲に関心を持っていない。また、英語の授業に積極的に参加する様子は見られない。成績は下位に位置するが、授業中に自分の考えをゆっくり検討してワークシートに記述をする様子が見られる。

なお、生徒A、生徒Bは積極的に英語の楽曲のリクエストをする傾向にあるが、生徒C、生徒Dは英語の楽曲のリクエストを今年度1回もしていない。

## 2. 研究計画

### (1) 研究期間

2025年 4月1日～ 2026年 1月31日

準備：4月 生徒の実態調査

実践Ⅰ：4月～6月

実践Ⅱ：7月～11月

### (2) 研究データの収集方法

本研究では、以下の方法によりデータを収集した。

- ①実際に授業をした際の生徒の様子の映像を録画する（観察ののち必要に応じてインタビューを実施する）
- ②授業者が授業を行ったのち、生徒に振り返りを書かせる
- ③日々の担任と生徒の間で行われる連絡帳でのやりとりの内容もデータとして活用する

### (3) 授業デザインの方策

#### ア. 楽曲を取り入れた授業の概要

英語の楽曲を取り入れた授業を、a. 楽曲導入 b. 表現の理解 c. 楽曲の内容理解・分析・解釈 d. 歌唱練習 e. 楽曲研究（楽曲の分析結果の発表）の流れで展開した。

楽曲は通常の授業の冒頭で帯活動として扱った。そのため、a～eは、すべてを1時間の授業の中で行うのではなく、数時間をかけて行った。

この実践を行う前から行っている帯活動における「a. 楽曲導入」では、主に教師からの

発問、すなわち生徒にとっては「与えられた問い」で展開してきたが、この発問のあり方を改善していくことが、本実践研究の対象となるところである。なお、使用する楽曲は、年度当初に配布したリクエストカードに生徒が記入した希望曲を集め、その中から選んだ。

### イ. 楽曲導入における6つの段階

#### ① 生徒による問い創りの留意点

英語の楽曲内容と生徒の内面とを結び付けることを促すために Rothstein & Santana (2015) を参考にしながら、生徒が問いを創る際の方法や、その過程での教師と生徒それぞれの役割について検討した。

**表1 質問づくりの7つの段階と教師と生徒の役割**

|             | 教師の役割  | 生徒の役割  | 生徒が身につける思考力   |
|-------------|--|--|---|
| 質問の焦点       | 質問づくりを使うにあたっての目標を設定し、質問の焦点を考える。                  | なし   | なし  |
| ルールを紹介する    | 質問を出す際のルールを紹介し、全体を進行する。                          | ルールを使う際の難しさについて話し合う。   | メタ認知思考ルールを守る際の難しさについて互いの考えを話し合う。  |
| 質問を出す       | 生徒たちにやり方を説明し、質問の焦点を提示し、やり取りを観察しながら、必要に応じてサポートする。 | 小グループになって、質問の焦点から思い浮かぶ質問を出し合う。   | 発散思考ルールに基づいて、できるだけたくさんの多様な質問を出す。  |
| 質問を改善する     | 閉じた質問と開いた質問を簡単に説明し、それらを相互に変換する際のやり取りを見守り、サポートする。 | 閉じた質問と開いた質問、それぞれの長所と短所を出し合ったうえで、交互に質問を書き換える。                                     | メタ認知思考に必要な情報を得るために、異なる種類の質問の目的と使い道について考える。<br>収束思考一探索をより効果的なものにするために、質問を書き換える練習をする。 |
| 質問に優先順位をつける | 生徒たちにやり方を説明し、やり取りを観察しながら、必要に応じてサポートする。           | 出された質問を比較し、評価し、話し合っ、最も重要な三つの質問を選び出す。選んだ理由も言えるようにする。                              | 収束思考一出されたすべての質問を分析、比較、評価して、三つの質問を選び出す。  |
| 次のステップ      | 質問の使い方についてのやり方を指導する。                             | その質問を使って、教師が設定した目標を達成する計画を立てる。   | 収束思考一学習目標に合致した質問の使い方を検討する。  |
| 振り返り        | 振り返りのプロセスを進行する。                                  | 学んだことは何か？ どのようにして学んだか？ 今は何を知っているか？ それについてどう感じているか？ 学んだことをどのように応用できそうか？ について話し合う。 | メタ認知思考および収束思考一自分達の考えたことや学んだことについて振り返る。と同時に、自分の出発点と比較し、今いる到達点についても考える。               |

Rothstein & Santana (2015) の中では、高次な3つの思考力として以下のことが挙げられている (p.33)。拡散的（発散的）思考とは、たくさんのアイデアを考えだし、幅広く創造的に考えることである。収束的思考とは、答えや結論に向けて、情報やアイデアを分析したり統合したりすることである。メタ認知とは、自分が学んだことについて振り返ることである。

生徒たちが自由にアイデアを出したり、文章を分析したり、学んでいることを自分のものにしたりするためには、これらの3つの思考力が必要になると筆者は考えた。

#### ② 各段階のイメージ

楽曲導入では、6つの段階を踏むことで、生徒が自ら考え、自己決定することができるようにする。

#### 【第1段階】

教師は問い創りに関する2つの指示を生徒に確認させる。指示の内容を理解させ、それが問い創りにどのように役立つのかを意識させることをねらいとする。本実践では、鹿島・石黒 (2018) を参考に、問いの創り方に関する指示を検討し、以下のように生徒たちに紹介する。

最初に、できるだけたくさんの問いを創るという指示である。これは、生徒の自由な発想や活発な思考を促すためのものである。拡散的（発散的）思考を繰り返すことで、たくさんのアイデアを考えだし、幅広く創造的に考える力を育む。

次に、他者の問いについて評価したり、答えたりしないという指示である。まずは問いを創り出すことが求められるので、その問いの答えに関して延々と考えたり話し合いをしない。問いを創ることに集中してその問いに答えないことで、生徒たちにとって価値の低い問いへの話し合いには時間を費やさないようにする。

なお、すべての声を尊重するために、生徒の問いは発言のとおり教師が黒板等へ書き出すようにする。問いを発言のとおり書き出すことで、教師が意図的に生徒に代わって考えてしまっていることがないように、出された問いを尊重し、正当性を持たせる。そして、問いを創った生徒の自信を高めることにもなる。そうすることで、自分たちこそが問いを考えたのだという意識を生徒たちに持たせ、みんなの声に価値があることを認めさせることができる。

問いを創る授業の指示の確認は、まず個人で1分間行い、その後、班で2分間行う。

初回のみ、問いを創る授業の指示について

生徒同士で確認する時間を設ける。初回以降は第1段階における指示の確認を省略する。

#### 【第2段階】

教師が楽曲のタイトルや楽曲に関連する写真を黒板に提示し、曲の特徴や歌詞の意味を理解するヒントとなる発問を生徒に与える。

例

What is the topic of this song?

Who is the main character in this story?

What are they talking about?

#### 【第3段階】

教師から提示された題材と発問をもとに、生徒が自ら問いを創る。まず個人で2分間問いを考えた後、班で3分間、それぞれが創った問いを確認する。

例

How old is the main character?

Why do you think so?

Is this song a happy ending?

Tell me the reason. Why is she smiling?

#### 【第4段階】

特に取り上げたいと思う問いを選ぶ。まず個人で1分間考え、問いを1つ選択する。その後、3分間で班内の意見を共有・整理し、班として問いを1つに絞る。

ここで各班から出た問いを1つに絞る理由は、限られた帯活動の時間内に取り組む必要があるからである。

#### 【第5段階】

創った問いを使って楽曲について深く考える。まず、個人で2分間考えた後、班で3分間意見を共有し、班の考えをまとめる。次に、各班がまとめた問いをクラス全体に発表し、その中からクラス全員で考える問いを1つ選ぶ。その後、クラス全体で選んだ問いに対する答えを考える。

#### 【第6段階】

学習のまとめおよび問い創りの振り返りとして、この授業を通して感じたことや生徒自身の変容についてワークシートに記入する。

全体を通して、たくさんのアイデアを考えだし、幅広く創造的に考える拡散的（発散的）思考、答えや結論に向けて、情報やアイデアを分析したり統合したりする収束的思考、自分が学んだことについて振り返るメタ認知の3つを繰り返していく。

### Ⅲ 実践経過

#### 1. 実践Ⅰ：4月～6月

##### （1）楽曲の選定

4月の授業開きで、英語の楽曲のリクエストを募ると伝えた。授業で使用する楽曲は、リクエストカードで生徒から希望を受けたものの中から選んだ。既習事項の単語や文法との兼ね合いを考え、主に、生徒にとって既知の情報を基に歌詞の内容を推測しやすいものを選択した。

##### （2）主に教師からの発問で進める

4月から6月の期間は、帯活動として楽曲を取り扱ったが、生徒が自ら問いを創る学習活動は行わなかった。楽曲を聞いた後は、教師からの発問に答える形で授業を展開した。この期間と生徒が問いを自ら生み出す学習デザインに基づいた授業を実践する期間（7月～11月）を比較することで、研究課題1を検証した。

具体的な手順としては、まず、教師が歌詞カードを提示し、基本情報（作曲者、歌手、語彙についての情報等）を伝えた。その後、生徒が楽曲の特徴や歌詞の意味を理解する際に、教師からそれらを理解するためのヒントとなる問いかけをした。それを元に、生徒は「与えられた問い」に答えた。

図1は、実際に教師から生徒に提示したヒントとなる問いかけである。

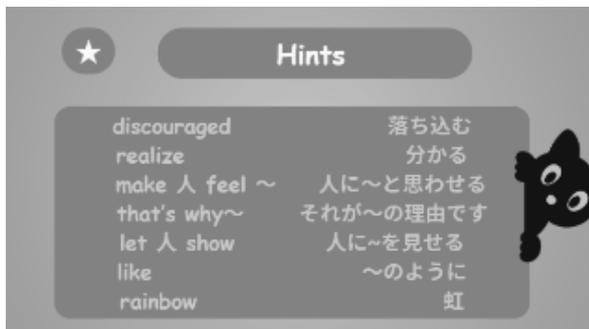
図1 楽曲の理解につながる問い



教師からの発問を受け、それについて生徒が個人で考えた。最初は What is this song about? や What is the mood of the song? という問いに対しての自分の考えを持たせるようにした。その後、教師から提示された歌詞の一部を個人で解釈し、ペアでそれを伝え合った。

取り扱う楽曲に未習の表現が多い場合は、歌詞を理解するのに時間がかかる生徒が出てくる。そこで、生徒の様子を見ながら必要に応じてヒントを与えた。図2は、歌詞を解釈するヒントとして、教師から生徒に提示したものである。

図2 歌詞を解釈するためのヒント



生徒から出た答えは、発表後に教師がまとめた。その際、教師側の解釈も交えながら、問いへの答えについての意見交流をした。授業のルールにある、拡散的（発散的）思考を繰り返すことを促すために、答えは人の数だけあっていいことを伝え、たくさんのアイデアを考え出すようにした。図3は、生徒から出た問いの答えをまとめたものである。生徒の言葉で英文をまとめ、全員が納得のいくものになるようにした。

図3 問いの答えをまとめたもの

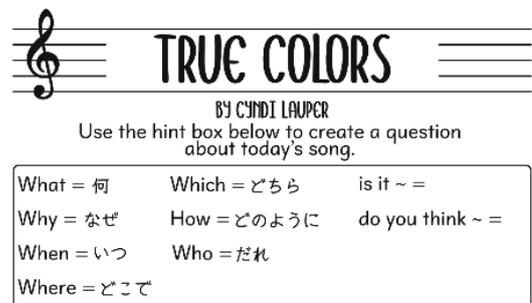


## 2. 実践Ⅱ：7月～11月

### (1) 生徒の言葉で問いを創る

7月～11月の期間は、4月から帯活動として行っている楽曲導入の方法を改善するために、生徒が問いを自ら生み出す学習デザインに基づいた授業を実施した。楽曲導入において歌詞カードを提示し、その後、生徒が歌詞を読み取り問いを作成した。図5は、問いを創るためのワークシートである。問いを創るうえで必要となる知識の定着を目的として、疑問詞を用いた疑問文の作り方に加え、一般動詞および be 動詞を用いた疑問文の作り方を確認した。

図5 問いを創るワークシート



例 Why do you think she wrote this song?  
I think she wrote the song because...  
What is it about?  
I think it is about...  
Who do you think this song is for?  
I think this song is for...

?

## (2) 問いの作成指導

生徒が班の中で問いを1つ選ぶ場面では、問いを創れなかった生徒も班の中で意見を交換することで、少しずつ問いを創る要領を得ていくことを目指した。図6は、生徒が班で問いを創る場面である。積極的に話し合いが行われ、分からない語彙や文法があるときには互いに教え合う等して確認を行うことができていた。

図6 生徒が班で問いを創る場面



## (3) 問いに対する答えを考える

創った問いを使って楽曲について深く考える場面では、最初は個人で2分、その後班で3分を使い意見を交流し、最後には班の意見を1つにまとめた。続いて、班ごとにまとめた意見を発表し、創った問いに対する解答をクラス全体で考えることで、楽曲の解釈をより幅広い視点で行った。班ごとにまとめた意見を話し合う時間では、例えば、*This artist is trying to say the importance of continuing to take on challenges. What do you think about it?* という生徒の発言に対して、別の生徒が *I think* を使って自分の考えを伝える活動とした。

個人で考える際に、表現したいことが英語で書き表せない生徒がいた場合、教師から個別に答えを考える助けとなるヒントを与える等、声かけを行った。また、生徒同士のやりとりの中で、自分の言いたいことを上手く言い表すことができない生徒がいた。その際は、形成的評価として何人かの生徒のやりとりを全体で共有することで、表現方法を学び、新たな知識とすることができていた。

## (4) 問いの分類

生徒たちが問いを創っていくうえで、自分の問いがどのようなものなのかを理解させるために荘加(2020)を参考に問いのカテゴリー分けを授業で行った。問いを分類することで、自分たちがどのように問いを創ればいいのか、そして本当に何を知りたいのかを明確にした。

表2 問いの分類を示したもの

|     | 外的な問い  | 内的な問い  |
|-----|--|--|
| 定義  | 自分の外部に向く問い<br>-答える上で情報が重要  | 自分の内部に向く問い<br>-答える上で情報が重要ではない  |
| 例   | 事実/予測<br>-どうか?/どうなりそうか?<br>・What does the composer want to convey through this song?<br>・Why did they act this way?<br>・What will the characters in the song do next?<br><br>法則/原理<br>-どういう仕組みか?<br>・Why is the same expression being used repeatedly? | 希望/目標<br>-どうありたいか?<br>・What kind of life do you want to live?<br>・What is your true color like?<br>・How did you get over the wall?<br><br>規範<br>-どうあるべきか?<br>・How should I (we) be?<br>・What way should we live? |
| 答え方 | 情報収集・分析  | 自分に問いかける   |

表2のように、私たちが答えを出そうとする問いを「外的な問い」と「内的な問い」に分類した。大きな違いは、問いが自分の外側に向いているか、内側に向いているかである。「外的な問い」に答えるには、情報を集めたり、その情報を処理したりする必要がある。具体例を挙げると、歌詞の情報から読み取れる事実を尋ねたり、その情報を使った予測をさせたりする問いである。一方で「内的な問い」は、歌詞の中に答えがあるものではない。答えが目前にない課題について、自ら問いを立てるというポイントを意識させた。今回は、実践である程度問いを創る場面に慣れてきたころに、TWICEの *This Is For* という楽曲で *How did you feel when you listened to this song?* や *Do you live positively?* という「内的な問い」を立てている生徒の例を挙げて全体に説明をした。

## (5) 楽曲導入の意図と段階的な工夫

7月~11月の実践期間は、第1期から第5期までに分けられる。それぞれの期間は約2週間であり、各期間に取り扱った楽曲は3曲である。楽曲導入の順番は、生徒がこれまでに学習してきたことを踏まえて、生徒の問い

の広がりや深まりが促されることを想定して決定した。第1期と第2期では、比較的歌詞の意味がわかりやすく、問いを立てやすいものを選んだ。第3期以降では、生徒の発達段階を踏まえて「内的な問い」が思いつきやすいと判断できるものを選んだ。表3は、使用した楽曲のリストである。

**表3 使用した楽曲のリスト**

|  |
|--|
| 第1期：(7月1日～) Daisies - Justin Bieber<br>(7月4日～) One Thing - One Direction<br>(7月9日～) High Hopes - Panic! At The Disco                       |
| 第2期：(7月16日～) Shake It Off - Taylor Swift<br>(9月1日～) Numb Little Bug - Em Beihold<br>(9月4日～) See You Again - Wiz Khalifa feat. Charlie Puth |
| 第3期：(9月9日～) Anti Hero - Taylor Swift<br>(9月12日～) This Is For - TWICE<br>(9月18日～) World's Smallest Violin - AJR                             |
| 第4期：(9月24日～) Sugar - Maroon 5<br>(9月29日～) If we hold on together - Diana Ross<br>(10月2日～) Circle of Life - Carmen Twillie, Lebo M          |
| 第5期：(10月7日～) Could Have Been Me - The Struts<br>(10月14日～) True Colors - Cyndi Lauper<br>(10月17日～) Permission to Dance - BTS                |

第2期の時点で、生徒全体がある程度問いを創ることに慣れてきたので、第3期の時点で、問いの分類について全体に指導をし、生徒が問いを創るうえで指針となるものを与えた。

**IV 実践Iの結果と考察**

以下は、実践I期間中、授業後の振り返りで書かせた抽出生徒の記述である。

**図4 振り返りにおける生徒の記述**

**生徒A**

授業で洋楽から英単語を学んだ。家でさらに洋楽を聞くようになり、英文をだんだんと聞き取れるようになった。そのおかげで、テストでリスニング問題の点数が上がった。

**生徒B**

テレビで流れてくる英語や街を歩いている外国人が喋っている英語を積極的に聞くようになりました。

**生徒C**

洋楽の魅力を知り、家で日常的に聞くようになった。そのおかげで日常で使えるフレーズを覚えられて、すごく役に立っている。

**生徒D**

自分が全然英語を聞き取れないことに気がつき、リスニング練習をバカけるようになった。

その他にも、生徒の振り返りには、「家で英語の曲を聞くようになった」「英語の歌詞の意味を考えながら洋楽を聞くようになった」等の、自らが学びの主体となってきたと捉えることができる記述があった。このように、英語の楽曲を最初に導入することで、英語を学んでいくうえでの変化が見られた。その一方で、授業中に積極的に意見を述べず、自身の学びが主体的になっていない生徒は一定数いた。冒頭の解決すべき課題で予想したように、単に楽曲を取り入れただけでは、生徒の自発的な学習意欲がそれほど生まれないのだと推測した。

**V 実践IIの結果と考察**

**研究課題1：生徒の学習に対する意識**

**(1) 生徒が問いを創ることによる影響**

年間を通して授業の最後に全生徒に書かせた授業の振り返り記述を集計し、生徒の学習に対する意欲の変化を調査した。実践Iと実践IIそれぞれに、授業の振り返りで「今日の授業で自分が問いについて考えることを通して、どの程度英語学習に対する意欲が高まったかを教えてください」という質問をした。回答の選択肢は「(とても)高まった」「まあまあ高まった」「あまり高まらなかった」「高まらなかった」の4つとし、それぞれを4～1点で数値化した。実践Iの意欲の高まりに関する度数分布を表4に、実践IIの意欲の高まりに関する度数分布を表5に示す。

**表4 実践Iにおける意欲の高まりに関する度数分布 (n=34)**

| 期          | 第1期 | 第2期 | 第3期 | 第4期 | 第5期 | 計  |
|------------|-----|-----|-----|-----|-----|----|
| (とても)高まった  | 8   | 18  | 14  | 18  | 22  | 34 |
| まあまあ高まった   | 24  | 15  | 20  | 16  | 12  | 34 |
| あまり高まらなかった | 2   | 1   | 0   | 0   | 0   | 34 |
| 高まらなかった    | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 34 |

**表5 実践IIにおける意欲の高まりに関する度数分布 (n=34)**

| 期          | 第1期 | 第2期 | 第3期 | 第4期 | 第5期 | 計  |
|------------|-----|-----|-----|-----|-----|----|
| (とても)高まった  | 12  | 20  | 20  | 21  | 25  | 34 |
| まあまあ高まった   | 20  | 13  | 14  | 13  | 9   | 34 |
| あまり高まらなかった | 2   | 1   | 0   | 0   | 0   | 34 |
| 高まらなかった    | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 34 |

4月～6月の実践Ⅰには、生徒が自ら問いを創る活動は行わなかった。一方、7月～11月の実践Ⅱでは、生徒自らが問いを創る活動を行った。両実践に共通して、いずれの期においても「高まらなかった」と回答した生徒が見られなかった点は、いずれの授業実践においても、生徒の学習意欲が一定程度維持されていたことを示していると考えられる。

一方で、意欲の高まり方には両実践の間で違いが見られる。実践Ⅰでは、「とても高まった」と回答した生徒数は期によって増減があり、第1期から第2期にかけて増加したものの、第3期では一時的に減少し、その後再び増加するという推移を示している。これに対し、実践Ⅱでは、第1期から第2期にかけて大きな増加が見られ、その後も各期を通して比較的高い人数が維持されている。

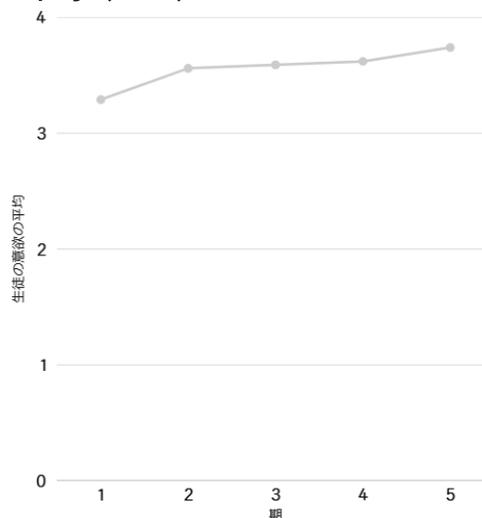
特に実践Ⅱでは、後半の期になるにつれて「とても高まった」と回答する生徒が増加し、第5期では25人に達している。また、「あまり高まらなかった」と回答した生徒は、第3期以降見られなくなっており、意欲の高まりに関する回答が肯定的な方向にまとまる傾向が見られた。このような傾向は、問いを創る活動を継続的に取り入れた授業実践において、より顕著に表れている。

次に、第1期から第5期までのそれぞれの期間に、生徒全体の意欲がどのように推移したのかを分析した。授業の振り返りで「今日の授業で自分が問いを立てることを通して、どの程度英語学習に対する意欲が高まったかを教えてください」という質問をした。回答の選択肢は「(とても)高まった」「まあまあ高まった」「あまり高まらなかった」「高まらなかった」の4つとし、それぞれを4～1点で数値化した。問いの作成による意欲の高まりの項目への回答の平均を表6に、平均の推移を図7に示す。

表6 問いの作成による意欲の高まりの項目への回答の平均 (n=34)

|        | 第1期  | 第2期  | 第3期  | 第4期  | 第5期  |
|--------|------|------|------|------|------|
| 意欲の平均値 | 3.29 | 3.56 | 3.59 | 3.62 | 3.74 |
| 標準偏差   | 0.57 | 0.55 | 0.49 | 0.49 | 0.44 |

図7 意欲の高まりに関する項目の回答の平均 (n=34)



問いを創る実践を行っていくことで、生徒の意欲は継続的に上昇していることが分かる。特に、先述したように第1期から第2期にかけて大きな伸びが見られ、実践Ⅱの第1期では34人中32人の生徒が、また第2期では34人中33人の生徒が、問いを立てることを通して英語学習に対する意欲が「(とても)高まった」または「まあまあ高まった」と回答しており、両期ともに「高まらなかった」と回答した生徒はいなかった。第2期以降も増加傾向は続いた。第1期から第5期まで下降が1度もないことから、授業内容、指導法、学習の達成感等が効果をもたらした可能性がある。また、第5期で最も高い値を示しているため、この期間の取り組みは、短期的な効果ではなく、継続的な効果をもたらしている可能性が示唆される。

(2) 問いを創ることで起きた変化①

第1期の生徒の振り返りに「問いを創ることがその先にあるから、より深く曲を聴こうとするようになった」「英語の歌の歌詞の意味をさらに知りたくなった」という記述が見られた。この時点で、全34人の生徒の内、8名

の生徒が問いを創ることで意欲が高まるといった内容の記述をしている。表7は、抽出生徒が第1期に振り返りで記述した内容である。

**表7 第1期の生徒の振り返りの記述**

|     |   |
|-----|---|
| 生徒A | 問いを作らないとって思うとより深く曲を聞こうとするようになった。授業の後でもっと聞きたい。                                   |
| 生徒B | 問いを作って考えていくのが難しいです。意味がわからない表現がたくさんありました。  |
| 生徒C | なぜ？と問いを作ることで周りの意見を聞いてその曲についてよりよく知ることができた。                                       |
| 生徒D | 洋楽で分からない単語があります。単語の場所を変えることで文の意味が変わったり、文の入れ替えをしたら意味が変わってきたり、日本語と違うなと思うようになりました。 |

生徒Aは「より深く曲を聞こうとするようになった」と言い、授業後にもさらに曲を聴いて、理解を深めたいという意欲を示している。問い創りによって理解が深まっただけでなく、その後の学びを深めようとする姿勢が強調されている。

生徒Bの記述からは、問い創りに難しさを感じていることが分かる。ただ、授業の様子からは、今後さらに学んでいきたいという意欲も感じられた。生徒Bへのインタビューでは「自分で問いをつくることで学習に対する変化はありましたか」という質問に対して、「問いを創るから、深く知りたくなって調べるようになりました。よく英語の曲を聞くようになったし、英語の力がついてと思います。でも、問いを英語にするのが難しいです。訳が難しいです。表現方法がいつもは主語・動詞だけど、英語の曲ならではの表現等があることが分かりました」と述べた。

生徒Cは、問いを創ったことで周りの意見を聞き、そのことからその曲についてよりよく知ることができたとして述べている。生徒Cへのインタビューでは、同様の質問に対し「歌詞の内容の意味や、なぜこの曲が作られたのか等、曲について深く知りたくなった」と答えた。「具体的にどの曲で、どんな変化があったのか」と尋ねると、Panic! At The Disco の High Hopes について言及し、「この曲を聞いてすぐくポジティブな気持ちになった。作っ

た人がどんな人だったのか、どうやって気持ちをあげているのかが気になったし、自分でいろいろ調べた」と述べた。

生徒Dは、分からない単語や語順の入れ替えによって起こる意味の変化に気づき、日本語と英語の違いを考えるようになった。インタビューでは「英語の歌を聞いたときに、何を言っているか聞き取れないのはもとより、歌詞の意味までが分からなかったりしてショックを受けます。でも、聞き取れないのも意味がわからないのも私の力不足だと思うと、勉強しようという意欲が湧いてきます。問いを創ることが始まって、英語の歌を聞くときに歌詞のことを意識するようになりました」と述べた。

これらの結果から、一人一人の生徒が問いを考えるという行為自体が、意欲を高めることに関係していると考えた。

**(3) 問いを創ることで起きた変化②**

第2期では、図7の生徒の意欲の推移のグラフからも分かるように、意欲の伸び幅はやや小さくなっている。生徒の振り返りからは、「問いを創ることで、歌詞の意味を考えることができ、その時に文法についても見直すことができました。サビの歌詞の意味を考えることで、何を伝えたいのかが分かるようになって面白かったです」「普通に自分は洋楽が好きで、家でいつも聞いているけど、その知っている曲を学校で聞くのとは全然違って、学校で聞いたほうがなんかより良い曲に思えてくるし、歌詞の意味が書いていなくて、自分たちで考えて読解していくのも結構好きだから、そういうところで授業のやる気とかが高まっていきました」等の意欲が向上したと捉えられる振り返りがあった。第2期全体では、34人の生徒の内、11名の生徒が問いを創ることで意欲が高まるといった内容の記述をしている。

第3期では、意欲の下降が無かったものの、大きな変化は見られなかった。生徒の振り返

りからは、「英語の歌詞の意味を詳しく知ることができて、他の歌の歌詞も知りたいと思うようになった」「問いを作ることによって、より英語の歌についての理解が深まる。歌に入っている単語とか、曲の名前の意味等を調べるようになった」等の意欲と関連する振り返りがあった。第3期全体では、34人の生徒の内、12名の生徒が問いを創ることで意欲が高まるといった内容の記述をしている。

第4期では、第3期と同様に大きな変化は見られなかったものの、生徒の振り返りからは、「歌詞にある単語の意味は、比喩的な表現で表されていることがあって、歌詞のまま受け取らないこともあると知りました。歌詞に込められている深い意味について興味がでてきたし、英語の歌で伝えたいことや歌詞の意味をより知りたくなりました」といった、自身の学習を振り返り、今後の学習への意欲を感じさせるものがあった。第4期全体では、34人の生徒の内、13名の生徒が問いを創ることで意欲が高まるといった内容の記述をしている。

第5期では、実践を始めた頃から比べると、より確かな手応えを感じる事ができた。生徒の振り返りからは、34人の生徒の内、14人の生徒が問いを創ることで意欲が高まるといった内容の記述をしている。表8は、抽出生徒が第5期に振り返りで記述した内容である。

表8 第5期の生徒の振り返りの記述

|     |   |
|-----|---|
| 生徒A | 歌詞についてよく考えて問いを出すことで、英語の文章の意味のみんなの解釈が聞けて、更に考えが深められた。   |
| 生徒B | 洋楽の歌詞の意味というのは、読解してみても初めにこんなに考えられていてこんなに深い考えをしているんだなと感じることができました。一番作者が伝えたい文のときはどの様になっているのかとか、これからはもっと耳を傾けて聞いていきたいと思いました。 |
| 生徒C | 問いを作ることによって、歌詞の意味について詳しく分かるようになった。今まで塾で英語をやっていたけれど、文の構成はよくわからなかった。問いを作ることで文の組み立て方がわかってやる気になった。                          |
| 生徒D | より曲を深掘りするようになり、特定の単語や表現への理解が深まったように感じます。時間が許すのなら、もっとやってくれてもいい気がします。   |

生徒Aは、よく考えて問いを創ったうえで、周りの人の解釈を聞くことで、より考えを深めている。英語の楽曲に関心を持っていた生徒Bは、洋楽の歌詞の意味を読解することにさらに関心を持ち、今後も、楽曲を丁寧に聞

いていきたいと述べている。英語の楽曲に関心を持っていなかった生徒Cの記述からは、積極的に言語の構造や意味について探求したいという姿勢が見られるようになった。生徒C同様に、英語の楽曲に関心を持っておらず、英語の授業に積極的に参加する様子が見られなかった生徒Dは、特定の単語や表現への理解の深まりについて述べ、さらに授業で取り扱ってほしいと述べている。

授業の回数を重ねていく中で、生徒全体の振り返りから意欲が高まっていると考えられる記述が出てきた。全体として、生徒が授業を受ける様子からは、問いを創るうえで必要となる楽曲の歌詞の内容を理解するために、文法について教師に尋ねたり、見慣れない単語を自ら調べてワークシートに記述したりしている姿が見られた。このことから、実践Iと比べて、取り扱った楽曲の意味・内容により関心を持つ生徒が出てきたと捉えた。

## 研究課題2：意欲と関係する問い

### (1) 問いの分類ごとの意欲の高まり

先に述べたように、問いを創ることで意欲が向上することが分かった。それでは、どのような問いが生徒の意欲と関係するのだろうか。

それを調べるために、まず、生徒が創った問いを「外的な問い」と「内的な問い」に分類した。そして、問いの分類ごとに、振り返りでの意欲の高まりへの回答の平均を算出した。回答の選択肢は、「(とても)高まった」「まあまあ高まった」「あまり高まらなかった」「高まらなかった」の4つとし、それぞれを4～1で数値化した。表9に問いの分類ごとの意欲の高まりの項目への回答の平均を示す。

全体の平均および内的・外的な問いのいずれにおいても、第1期から第5期にかけて数値の上昇が見られた。「内的な問い」における意欲の平均値は、第1期の3.30から第5期には3.75へと上昇しており、期間を通して一定

の伸びが見られる。

**表9 作成した問いの分類ごとの意欲の高まりの項目への回答の平均 (n=34)**

|        | 第1期        | 第2期        | 第3期        | 第4期        | 第5期        |
|--------|------------|------------|------------|------------|------------|
| 意欲の平均値 | 3.29       | 3.56       | 3.59       | 3.62       | 3.74       |
| 標準偏差   | 0.57       | 0.55       | 0.49       | 0.49       | 0.44       |
| 内的な問い  | 3.30 (10人) | 3.55 (11人) | 3.58 (14人) | 3.65 (17人) | 3.75 (16人) |
| 標準偏差   | 0.46       | 0.50       | 0.49       | 0.48       | 0.43       |
| 外的な問い  | 3.29 (24人) | 3.65 (23人) | 3.65 (20人) | 3.59 (17人) | 3.72 (18人) |
| 標準偏差   | 0.61       | 0.56       | 0.48       | 0.49       | 0.45       |

一方、「外的な問い」においても、平均値は3.29から3.72へと上昇しており、両者ともに学習意欲の向上が確認された。しかし、第1と第5期の平均との差に着目すると、その伸びの程度は「内的な問い」と「外的な問い」で大きな差はなく、結果的に意欲の平均値に明確な差が生じたとは言い難い。また、第2期および第3期においては、「外的な問い」の方が「内的な問い」よりも高い意欲を示しており、意欲の変化が問いの種類のみによって一貫して説明できるわけではないことがうかがえる。これらの結果には、その時期に扱った楽曲の歌詞内容や生徒の興味・関心との親和性、さらには活動の進め方など、問いの性質以外の要因が影響している可能性が考えられる。

**(2) 抽出生徒ごとの問いの特徴と意欲との関係**

生徒が創った問いをさらに細かく分析するために、抽出生徒の問いをまとめた。表10は、抽出生徒Aが各楽曲で創った問いの一覧である。

生徒Aは第1期で、Why is this song's title Daisies? Who is this song for? How can I find hope?等、楽曲の題名や歌詞の主題を問う「外的な問い」を主に創っていた。これらの問いは、楽曲内容の理解を目的とするものであり、生徒自身の経験や内面と直接結びつくものではなかった。

一方、第2期に Taylor Swift の Shake It Off を取り扱った際には、How to be positive?という問いを創っており、歌詞のメ

ッセージを自己の生き方や心情と結びつけて捉えようとする「内的な問い」へと変化が見られた。

**表10 生徒Aの創った問い**

|   |   |
|---|---|
| 第1期 : Daisies - Justin Bieber<br>One Thing - One Direction<br>High Hopes - Panic! At The Disco                      | Why is this song's title Daisies?<br>Who is this song for?<br>How can I find hope?  |
| 第2期 : Shake It Off - Taylor Swift<br>Numb Little Bug - Em Beihold<br>See You Again - Wiz Khalifa feat. Charlie Puth | How to be positive?<br>Why did they use the word "bug" in this song?<br>Why do they want to see you again?                        |
| 第3期 : Anti Hero - Taylor Swift<br>This Is For - TWICE<br>World's Smallest Violin - AJR                              | What is your anti hero?<br>Who is this song written for?<br>What is the world's smallest violin?                                  |
| 第4期 : Sugar - Maroon 5<br>If we hold on together - Diana Ross<br>Circle of Life - Carmen Twillie, Lebo M            | What is love?<br>How do you know your dreams won't die?<br>What is a diamond heart?   |
| 第5期 : Could Have Been Me - The Struts<br>True Colors - Cyndi Lauper<br>Permission to Dance - BTS                    | Which do you value more: work or adventure?<br>Why are true colors beautiful?<br>What kind of relationship do "I" and "you" have? |

さらに、第3期に Taylor Swift の Anti Hero を取り扱った際には、What is your anti hero?という問いを創っており、楽曲のテーマを自己内省へと関連づけた問いが見られた。生徒Aの意欲の推移を見ると、全期間を通して概ね4～3の範囲で推移しており、意欲は高めで安定していた。最低値は2であったが、一時的なものであり、継続的な低下や大きな落ち込みは確認されなかった。

生徒が自ら問いを創ることによって一定の成果は見られた。さらに「問いをつくることで意欲が向上している生徒については、どのような問いが意欲と関係するのか」を検討するため、抽出生徒に質問をした。

以下は、抽出生徒Aが実践授業第5期までを受け終えた後に筆者と話した内容である。教師側から「今回の『問いを創る学習』を通して、どんなことを学びましたか」と質問をした。なお、ICレコーダーでは録音はせず、その場で筆者がタイピングをして記録したものである。

(前略)

A 問いに対して1つしか答えがないものよりも、その人の人生について尋ねるような、答えが多様な問いを創ることができて勉強になった。もっと問いを創って、考えを友だちと伝え合いたい。

T 問いを創ることについて、やりにくいと感じた点はありませんでしたか。

- A 問いを創ることについてネガティブなことはない。
- T 英語の言い回しについて考える問いと、意味を深く解釈する問いでは、どちらが意欲は高まりましたか。
- A 英語の言い回しについての問いでは意欲が高まるし、意味について深く解釈するものもためになる。
- T 「その人の人生について尋ねるような、答えが多様な問いを創ることができて勉強になった」と言っていました。自分が創ったどの問いを指しますか。
- A 最初のころ（第1期）に創った **How can I find hope?** と（第2期） **How to be positive?** です。
- T その問いを創ることで、自分の英語学習に影響はありましたか。
- A 問いを考えると、その曲を深めたり言葉を調べたりして、一曲について深く知れる。違う国の言語で想像が付きにくい、歌ならどの国にもあるし、もっと勉強して歌を理解したいと思った。その歌詞の気になる表現をインターネットで調べてみた。

生徒Aは、1つしか答えがないものよりも、その人の人生について尋ねるような、答えが多様な問いが勉強になったと述べている。決まった答えのある「与えられた問い」に答える学習よりも、多様な解釈や考えを許容する問いの方が学びを深めることに気づいている。また、問いを創る活動は、負担や抵抗としてではなく、前向きに受け止められていることが分かる。最後のやり取りからは、「もっと勉強して歌を理解したい」「気になる表現をインターネットで調べてみた」といったように、問いが学習行動の変化を引き起こしていることが分かる。これらのことから、生徒Aは、「内的な問い」を創ることで、受動的な理解から、能動的な探究行動へと学習を転換さ

せていると筆者は考えた。表11は、抽出生徒Bが各楽曲で創った問いの一覧である。

表11 生徒Bの創った問い

|  |   |
|--|---|
| 第1期: Daisies - Justin Bieber<br>One Thing - One Direction<br>High Hopes - Panic! At The Disco                      | Who do you think he wrote this song for?<br>What is the most important thing you have?<br>Who is the song for?                            |
| 第2期: Shake It Off - Taylor Swift<br>Numb Little Bug - Em Beihold<br>See You Again - Wiz Khalifa feat. Charlie Puth | Why can they be so positive?<br>Why did she become tired of life?<br>What did the main character try to tell them?                        |
| 第3期: Anti Hero - Taylor Swift<br>This Is For - TWICE<br>World's Smallest Violin - AJR                              | Does everyone really agree that "I'm the problem"?<br>Who is this song written for?<br>What's the meaning of the world's smallest violin? |
| 第4期: Sugar - Maroon 5<br>If we hold on together - Diana Ross<br>Circle of Life - Carmen Twillie, Lebo M            | What is your sugar?<br>What is the truth in the heart?<br>What is the Circle of Life?   |
| 第5期: Could Have Been Me - The Struts<br>True Colors - Cyndi Lauper<br>Permission to Dance - BTS                    | Why do they want to taste love and pain?<br>Is it important to show them "True Colors"?<br>When is the best time to listen to this song?  |

生徒Bは第4期で Maroon 5 の **Sugar** を取り扱った際、**What is your sugar?** という問いを創った。この問いは、クラス全体で深めていく問いには選ばれなかったものの、グループで問いについて話をする場面で、活発にこの問いについて議論をする生徒Bの姿が見られた。全体として、生徒Bの意欲は高め（4～3）で安定しており、意欲が継続的に高かった。この生徒の検証の結果からは、「外的な問い」と「内的な問い」による大きな意欲の差は見られなかった。

以下は、抽出生徒Bが実践授業第5期までを受け終えた後に筆者と話した内容である。

（前略）

（上記の質問に対して生徒Bはしばらく考え込んでいたため、再度質問を変えて聞いた）

- T 問いを創る活動について、やってみてどんな気持ちでしたか。
- B 嫌ではないけど難しいです。問いを創って考えていくのが難しいです。分かるときもあれば分からないときもあるし、意味がわからないときは…少しでも分からないとしっかりと訳したいから。
- T 授業を通して、何か新しく学んだと感じることはありましたか。また、自分が変わったという実感はありましたか。
- B わからない。学んだことがない訳ではない。変化したという思いはないかも。実感ないけど変わったかも。創ることは好きだけど、何を学んだかはわからないで

す。

T 曲の好みによって意欲は変わりましたか。

B 好きな曲が出たら歌えるようになりたいと思ったし、好きになると歌っています。

T 自分の英語学習への影響を具体的に教えてください。

B 発音は普通に話すときと違うので、違いを知ることができて面白いです。初めて見る表現をたくさん知れて、勉強になります。あと、リクエストした曲を皆が知っているのかなって考えることがあります。授業で好きな曲が流れていることが嬉しいので。知らない曲ももちろん興味があるし、たくさん聞きたいです。

生徒Bは、問いを創る活動について、「嫌ではないけど難しい」と述べていることから、問いを創ることに対する情意面での拒否感は見られず、継続可能な学習活動であることが分かる。また、「少しでも分からないとしっかりと訳したい」と述べていることから、意味が不明な部分を放置せず、正確に理解しようとする姿勢を持っていることが分かる。新しい表現への関心や、他者の反応を想像する視点があると読み取れることから、問いを創る活動が、学習内容の広がりを生んでいると筆者は捉えた。しかし、これらのやり取りからは、どのような問いが意欲と関係するのかを判断することはできなかった。表12は、抽出生徒Cが各楽曲で創った問いの一覧である。

表12 生徒Cの創った問い

|  |  |
|--|--|
| 第1期 : Daisies - Justin Bieber<br>One Thing - One Direction<br>High Hopes - Panic! At The Disco                       | Who is "honey" in this song?<br>What is important to you?<br>Are You Ambitious?  |
| 第2期 : Shake It Off - Taylor Swift<br>Numb Little Bug - Em Beilhold<br>See You Again - Wiz Khalifa feat. Charlie Puth | Why does this song repeat the same words?<br>What does "boat" represent?<br>What is "last ride"?   |
| 第3期 : Anti Hero - Taylor Swift<br>This Is For - TWICE<br>World's Smallest Violin - AJR                               | How did she get over the wall?<br>How did you feel when you listened to this song?<br>What problem does the singer talk about in the song? |
| 第4期 : Sugar - Maroon 5<br>If we hold on together - Diana Ross<br>Circle of Life - Carmen Twillie, Lebo M             | What is the sweetness of life?<br>What does life mean to you?<br>What does the Zulu chant mean?  |
| 第5期 : Could Have Been Me - The Struts<br>True Colors - Cyndi Lauper<br>Permission to Dance - BTS                     | Why did he say "Could have been me"?<br>What are True Colors?<br>Why did they make this song?  |

生徒Cは第3期で TWICE の This Is For を取り扱った際、How did you feel when you

listened to this song?という問いを創った。第4期の Maroon 5 の Sugar、Diana Ross の If we hold on together の回にも「内的な問い」を創っており、グループ活動の際にはいつも以上に活発に問いについて議論を深める姿が見られた。

以下は、抽出生徒Cが実践授業第5期までを受け終えた後に筆者と話した内容である。

(前略)

C 洋楽が結構好きになって、英単語を知るきっかけになりました。テストにも役立つのでいいと思います。

T 曲の好みによって意欲は変わりましたか。

C 問いを創ることで英語自体に興味が出てくるので、好きな曲でもそうでない曲でも、意味を知らないまま聞いていた曲のメッセージを考えるきっかけになりました。

T 自分の英語学習への影響を具体的に教えてください。

C (問いを創ることで) その歌を作った人の気持ちや、なぜこのような歌を作ったのかということを知りたくなりました。英語の歌詞を訳すことで、和訳の力が少しついたと思うし、もっと的確な語句を使えるよう語彙力を向上させたいと思いました。

生徒Cは、「英語自体に興味が出てくる」と述べており、問いを創ることが特定の楽曲への関心を超えて、英語という言語そのものへの関心につながっていることが分かる。また、歌の作り手の気持ちや、なぜその歌が作られたのかに関心を向けていることから、問いを創ることで、歌詞を単なる英語教材としてではなく、意味や背景をもつ表現として捉える姿勢が育っている。しかし、これらのやり取りからは、どのような問いが意欲と関係する

のかを判断することはできなかった。表 13 は、抽出生徒 D が各楽曲で創った問いの一覧である。

表 13 生徒 D の創った問い

|   |  |
|---|--|
| 第 1 期 : Daisies - Justin Bieber<br>One Thing - One Direction<br>High Hopes - Panic! At The Disco                      | How did he feel when he wrote this song?<br>What is "One thing"?<br>Must we have high hopes to live?                   |
| 第 2 期 : Shake It Off - Taylor Swift<br>Numb Little Bug - Em Beihold<br>See You Again - Wiz Khalifa feat. Charlie Puth | Why did Taylor Swift write this song?<br>How to enjoy life?<br>What did they want to say?                              |
| 第 3 期 : Anti Hero - Taylor Swift<br>This Is For - TWICE<br>World's Smallest Violin - AJR                              | Who are the lyrics written for?<br>Do you live positively?<br>What instrument do they play?                            |
| 第 4 期 : Sugar - Maroon 5<br>If we hold on together - Diana Ross<br>Circle of Life - Carmen Twillie, Lebo M            | Is loving someone important in life?<br>Why did she write about encouraging life?<br>What is a diamond heart?          |
| 第 5 期 : Could Have Been Me - The Struts<br>True Colors - Cyndi Lauper<br>Permission to Dance - BTS                    | Why do they want to experience pain?<br>What is your true color like?<br>When is the best time to listen to this song? |

生徒 D は第 3 期の TWICE の This Is For で Do you live positively? という問いを創った。第 5 期の Cyndi Lauper の True Colors では、What is your true color like? という問いを創り、それぞれの授業の振り返りにおいて、その問いを創ったことで、自分自身がさらに楽曲の歌詞を解釈し、曲の意味を追求していきたいという旨の記述をしていた。

以下は、抽出生徒 C が実践授業第 5 期までを受け終えた後に筆者と話した内容である。

(前略)

D 自分で問いを創ることは、より歌詞について深く考えることにつながっていると思います。しかし、(私の場合)あくまで一時的な深読みにとどまるため、歌詞に用いられる文法等を覚えるには至っていません。また、創られる問いに関しても、作曲年代や作曲理由等、どちらかという英語学習と直接的な関連性のないものも多く感じます。そういった内容も重要だとは思いますが、こういったことを総合すると、あくまで私個人の現状であるものの、自分で問いを創ることが学習に与えている影響は、ごく小さな範囲に留まっていると考えられます。しかし、強調しておきたいのは、私は問い創りが不要だとは考えていません。私は忘れっぽく、音楽に疎いためこのような状況になっていますが、問い創りをしたことで、その曲を注意深く聞き、自らの語彙を増やす

人や、その曲に興味を持ち、音楽を使った学習に目覚める人もいるだろうと思います。問い創りが私に与えている影響は少ないが、可能性のある、興味深い学習法だと思います。偉そうな言い方ですみません。個人的には、今後も継続して行ってもらえると嬉しいです。

生徒 D は「自分で問いを創ることが学習に与えている影響は、ごく小さな範囲に留まっている」と述べており、本人の実感から問い創りが意欲につながってはいないということが分かった。しかし、もともと音楽が好きで、さらに意欲が高まった生徒 A に対して、英語の楽曲に関心を持っていなかった生徒 D の授業内外での様子の変容が印象的であった。以前までは英語の授業に対して前のめりではなかったが、実践授業を受けた後、生徒 D は授業外の休み時間等に、英語の歌詞の意味や、その発音についての質問をするようになった。

## VI まとめと今後の課題

### (1) まとめ

本研究の目的は、英語の楽曲内容と生徒の内面を結びつけることを促し、生徒が自ら問いを生み出す学習を通して、英語学習への主体的な取り組みを促進する方策を探ることであった。

実践の結果、生徒が自ら問いを創る活動を継続的に行うことで、英語学習に対する意欲が全体的に向上し、一定数の生徒の学習に対する意識は、受動的なものから能動的なものへと変化することが明らかになった。特に、問いを創る活動を行わなかった実践 I と比較すると、実践 II では意欲が上昇し、その傾向が継続的に見られた。このことから、「与えられた問い」に答える学習と比べると、「自ら問いを立てる学習」の方が、生徒の学習意欲の向上に一定の効果をもたらすと考えられる。

次に、生徒の意欲と関係する問いの特徴として、「内的な問い」の有効性がうかがわれた。歌詞の事実確認や内容理解にとどまる「外的な問い」に比べて、生徒自身の価値観や生き方、感情と結び付く「内的な問い」は、学習内容を自己の内面と関連付けるきっかけとなり、より高い意欲の喚起につながっていた。抽出生徒への質問からも、「内的な問い」を創った生徒ほど、授業外で歌詞を調べたり、楽曲を繰り返し聴いたりするなど、能動的な学習行動へとつなげている様子が見られた。

しかし、抽出生徒は全体として意欲が安定して高い傾向にあったことから、「内的な問い」を創ったことのみが意欲の高さを直接的に規定したと断定することはできない。楽曲のテーマや歌詞内容、特定のアーティストへの親近感といった要因も、意欲に影響を与えていた可能性が考えられる。

また、生徒全員が問い創りを通して明確な意欲の高まりを実感しているわけではないことも明らかになった。問いを創ることに難しさを感じたり、自身の変化を言語化できなかったりする生徒もあり、問い創りが生徒に与える影響には個人差があることが分かった。しかし、そのような生徒においても、語彙への注目や発音への関心、他者の反応を想像する視点など、学習の広がりが見られている様子が見られた。

これらのことから、生徒が自ら問いを生み出す学習は、生徒の興味・関心を喚起するだけでなく、英語学習を自分事として捉え直すきっかけとなり得ると考えられる。

## (2) 今後の課題

生徒が自ら問いを生み出す学習は、生徒の意欲や学習行動に一定の効果をもたらすことが示された一方で、課題も明らかになった。生徒が問いを創る場面で、問いをより創りやすくするために、教師側からヒントとなる問いを提示した。その結果、教師が提示した英文の型にはまってしまい、生徒たちはその例

を元に考える傾向が見られた。生徒の自由な発想を妨げないためにも、教師からの足場かけとなる例としての問いの出し方を、今後は工夫していく必要がある。また、様々な問いが生徒から出てくることを期待するには、さらにこの実践を継続していく必要があると考える。

## 引用文献・参考文献

- 1) Leslie, I. (2014) *Curious: The Desire to Know and Why Your Future Depends On It*. Basic Books. [須川綾子 (訳) (2022). 『子どもは40000回質問する—あなたの人生を創る「好奇心」の驚くべき力』光文社]
- 2) 鹿嶋真弓・石黒康夫 (2018). 『問いを創る授業—子どものつぶやきから始める主体的で深い学び』図書文化社.
- 3) Saricoban, A. & Metin, E. (2000). Songs, verse and games for teaching grammar. *The Internet TESL Journal* 6(10), 1–6.
- 4) 荘加大祐. (2020). Liffel. 問いの分類—リサーチ系とビジョン系. (<https://liffel.com/logical-thinking/question-type/> 閲覧日 2025. 10. 24)
- 5) Rothstein, D. & Santana, L. (2011). *Make Just One Change: Teach Students to Ask Their Own Questions*. Harvard Education Press. [吉田新一郎 (訳) (2015). 『たった一つを変えるだけ—クラスも教師も自立する質問づくり』新評論]